要約

貨幣制度の下で自己の行動を決定するための価値基準である“貨幣意識”が，“ミクロ・メゾ・マクロ・ループ”とどのような関係にあるかという問題は，貨幣制度を含む制度設計を考える上で重要な問題である。ミクロ・メゾ・マクロ・ループとは，ミクロの主体の認識や行動とマクロの社会的帰結，その間をつなぐメゾレベルにある制度の間の循環的相互作用構造である。本稿では，メゾに位置づけられる地域通貨の流通が人々の価値意識にどのような影響を与えるのかを，東京都武蔵野市にて 9 ヶ月間実施された地域通貨「むチュー」の流通実験を通して調べた。

これまでに実施した貨幣に関する意識調査から，貨幣意識の下位尺度として「多様性」「公正」「利益志向」の 3 つが因子分析によって得られているが，本流通実験前後ではこれらの下位尺度得点に有意な差が見られなかった。しかしながら，地域住民の地域通貨に対する理解度の変化と貨幣意識の関係についての分析より，地域通貨の理解度を改善させた群で「多様性」のみが流通実験により有意にプラスに変化することが認められた。この理解度を改善させた群は，貨幣の多様性を是認する一方で，利子に対する肯定的な評価も強めている。すなわち，地域通貨の理念や特性を理解することは，それらに対する評価として，肯定と否定の両方を生み出しうることがわかった。

また，流通実験が 2008 年 10 月に発生したリーマンショックをまたいでいることから，金融危機のような経済社会環境の大規模な変化が人々の価値意識をどのように変容させたかを調べることができた。結果からベーシック・インカムを肯定する意識と拝金主義を否定する意識が強まっていることがわかった。とりわけこの 2 つはリーマンショック後に人々の批判にさらされた新自由主義を否定する項目であり，金融危機が人々の貨幣意識に影響を与えた可能性が高い。

キーワード：貨幣意識（money consciousness），地域通貨（community currency），
ミクロ・メゾ・マクロ・ループ（micro-meso-macro-loop），制度生態系（institutional ecology）